

# IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 162, 2013

## VIEW 展望

Outside/Inside 「外部」とはどこ？／加須屋明子…2

## INFORMATION 学会組織活動報告

総務委員会…3 機関誌編集委員会…3 支部・研究会だより 東部支部…3  
西部支部…3 中部支部…4 映像表現研究会…4-5

## REPORT 報告

関西支部第 67 回研究会「ジャン・コクトーの映画『詩人の血』（1930）にみるデッサンからの変容」／水田百合子…6 東部支部デジタルメディア研究会「デジタル映像の可能性」／河口洋一郎…6-7

## FORUM フォーラム

第 4 回（平成 25 年度）「日本学術振興会 育志賞」受賞候補者推薦要項…8

## FROM THE EDITORS

編集後記…8

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第 162 号」2013 年 4 月 1 日発行  
 発行人：豊原正智 編集担当／総務委員会：古賀太（委員長）・遠藤賢治・伏木啓・  
 末永航・石坂健治・小出正志  
 日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内  
 phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp  
<http://jasias.jp/>



日本映像学会

# Outside/Inside 「外部」とはどこ？

加須屋 明子

2月16日と17日に東京・六本木で開催された第3回世界メディア芸術コンベンション ICOMAG2013 に参加の機会を得た。そこでは異種混交的文化において「批評」とは何か？ということがテーマとされた。ポストモダン以降、文化の異種混交性が政治的・産業的に容認され、異質な諸領域が互いに分断されたまま並存する奇妙な状況が出現しているが、こうした脱政治化された異種混交的文化状況において、領域横断的な言語活動としての「批評」のスタイルとはどんなものでありうるのか、率直な議論が交わされた。

様々な領域で高度な専門化が進んだ現在、「批評」自体も専門化しているのだが、今やそれらを統合し、外へ開いてゆくことが求められている。「異種混交」あるいは雑文化性というものは、日本的特質の重要な要素でもあることから、それ自体を積極的肯定的に捉えながら、そこからいかに創造性を引き出し、言語を再度活性化させるかが話し合われた。今求められるのは、かつてあったような「目利き」による批評ではなく、世界に対する態度を行動へつなげてゆくこと、相互のリンクを見つけ出すこと、いわば一種の編集作業が批評と解された。こうした批評は、享受を通じて社会や政治への態度を変更させ、それを解釈してくれるものであって、生き方と結びつく。人々を誘惑しながら、ある時代に属しているものを「別」の場所へと連れてゆく。

このような場面で有効な態度として、座長の吉岡洋氏より「場違い Out of Place」という姿勢が有効であるとの指摘があったことは興味深い。その場固有の暗黙のルールに従わないこと。それぞれ固有の場所に落ち着いた (In place) 位置から外れ、ある場所にいながら別の場所のことを考える行為、それが批評とされた。この場所ではない「他」に向けて語ること、他者に向けられた発話。それこそが、言語に批評性を回復してくれるはずだ。

しかしこの「別の場所」「他者」とはどこ / 誰だろう。他者を想定することで内部の結束は固まる。ホモソーシャルな絆はいたるところで散見される。内輪だけに通じる言葉を使っている会話は居心地が良く、秘密を共有する楽しさは何者にも代えがたいのだ。

大澤真幸氏からは、相対主義やシニシズムの蔓延する状況をオタクのと捉えた上で、そうしたオタクの心性においては、普遍性と特殊性とが短絡しており「外」(窓)がない、と、窓のない個室で複数台のパソコンに向かう典型的なオタクのイメージが提示された。そこには「アイロニカルな没入」が見られ、意識的に知っていることと、無意識に信じていることにねじれがあり、意識と行動とがねじれる。私たちは意味のない現実を受け入れがたいので、嘘に没入する。無意味な現実の断片よりは安心できるのだ。こうした行動はどこか信仰と似ている。没入しているものが、既に普遍的領域であるため、そこから批評的距離を取ることができない。ところが話を聞いてくれる他者 (= 批評) が誰もいない状況には、私たちは耐えられない。

オタクの個室に窓を、開かれたオタクを、という、会議最後にフランスから寄せられたメッセージは説得力があり、可能性を感じるものだった。エルキ・フータモ氏からのメディア考古学の提案も意義深く、改めて歴史の重要性を感じ

た。ただ、ある種の隔たりを絶えず意識させられていたのも事実である。この違和感はどこから来るのだろうか、引き続き考えを巡らせてみて、窓のない個室のオタクのように、外部を失った閉塞感、つまり同質の世界観と仲間内の言語で守られた安心と、外側の世界を排除するような圧迫感が、ICOMAG に参加しながら (そしてまた混雑したメディア芸術祭の会場を歩きながら) 感じた不思議さの正体だったのかも知れないと思い当たった。私自身はその中に居場所を見つけることができず、その「外」にいないのだが、外部は存在しないことになっているので、そもそも私はどこにもいない—このような居心地の悪さを、もっと率直に申し述べればよかったのかも知れない。一方、はっきりと私の場所を指し示してくれるような、ある種「爽快」な気持ちを得られたのが、水戸美術館の「高嶺格のクール・ジャパン」展や、京都芸大ギャラリー @KCUA とソーシャル・キッチン の二会場で開催された「もののやりかた - 東京現在進行形 -」展であった。特に和田昌弘氏による傑作《主婦のためのスタイリッシュなハエ》は、世代や性別を越えて強く訴えかける力があり、ドキュメンタリーとフィクションとの緊張関係や個から普遍へとつなげる巧みさは観客を揺さぶり、思わず個々の語りを引き出す。いずれも映像を取り入れたインスタレーションであるが、今見えている世界の「外部 Outside」について想像力が伸びてゆくことが強く感じられた。ただし、これは非常に危険なことでもある。安全な内部から一步踏み出せば、世界は混沌とした無法状態におかれ、混乱、衝突、戦いであふれて「恐怖」に満ちている。

例えば2012年のベルリン・ビエンナーレのテーマは「恐れを忘れよ」であったが、会場には「あえて意見の不一致を生み出すようなイメージ」が充満していた。不一致から生まれる、複数の意見や議論こそが民主主義を保証するのである。キュレーターはワルシャワ (ポーランド) 出身、在住の映像作家、アルトゥール・ジミェフスキ。こうした展示についての評価は意見の分かれるところだろうが、シニカルに対象から距離を取るつもりで、実は普遍へと短絡し、外部を持たずに孤立して閉じこもり、過剰な情報とららはらに意味の少なさに疲弊するよりも、そこから一步踏み出し、行動することによって新たな関係性が生まれ、意味の豊かさへとつながるのではないか。争いや狂気や死など、想像力の暗い生産物とも向き合い、時に受け入れがたいものの挑戦にも応答することが重要である。

次の日本映像学会大会のテーマは Out of Control 制御不能、と伺って、Out の意味について更に考えさせられることとなった。人は何とか合理的な世界秩序を作り上げて世界を制御しようとする一方で、常にそこからは抜け落ちてゆく、制御に抗う要素が存在している。それは外 Out であると同時に、元は私たちの内 In にある / あったものではないか。そのようなものとしての「外部 Outside」へと向かうまなざし、語りかけの絶えざる実践を通じてこそ、私たちが生き延びるための力を回復することができるのだろう。大会における更なる議論の深まりに期待したい。

(かすや あきこ / 京都市立芸術大学)

Image Arts and Sciences 162 (2013) , 3

## 総務委員会報告

委員長 古賀 太

まず、各支部の経理に関して、12月1日及び今回(3月)の理事会で決定したことをお知らせします。

1. 各支部で3月末に10万円を超える残金がある場合、総会開催時までその超える分を本部に戻し入れる。
2. 各支部や研究会で講演をお願いする場合、原則として会員は無料、非会員は税込み3万円とする。
3. 会議費については弁当相当分とし、夕食会等は原則として認めないが、必要な場合は総務委員会に事前にご相談のこと。

また会員が参加する催しを全会員宛にメールでお知らせする件に関し、以下の通り理事会で決めました。

1. 配信する催しは入場無料を原則とする。ただし総務委員会が認める場合はその限りではない。
2. 配信の依頼は、その年度までの会費を払っており、その催しにおいて発表などの役割がある会員本人が行うこと。
3. その催しで発表などを行うメンバーで会費未納の会員の名前がある場合は、その会員が会費を納めなければ配信しない。
4. 発表などを行うメンバーに非会員がいる場合は、この機会に入会を勧めること。

4月より、あらゆる支払いを原則として銀行振り込みとします。本学会はみなし法人ということでネットバンキングには月額2100円がかかりますが、経理上のリスクと手間を軽減するために、実施することにしました。

(こが ふとし/日本大学芸術学部)

Image Arts and Sciences 162 (2013) , 3

## 機関誌編集委員会報告

委員長 藤井 仁子

編集委員会では、現在、『映像学』90号を鋭意編集中です。あわせて、すでに告知されておりますとおり、電子版での再出発が予定されている国際版『ICONICS』への投稿を募集中です。投稿規定をよくお確かめのうえ、奮ってご投稿ください。

投稿論文の査読にかんして1点、重要な変更がございます。この場を借りてご説明いたします。2013年度より、当該年度に掲載された投稿の全査読者の氏名を、年度ごとに誌面で公開することといたしました。編集委員の氏名はもともと全員あきらかにされておりますが、編集委員でない方に査読をお願いした場合も、同様に年度末に一括してお名前が公表されるということです。透明性を期するために公開可能な情報はできるだけ公開するという趣旨であり、かつ、隣接する他学会の査読体制に足並みを揃えるということでもあります。査読者が公開されると申しまして、あくまでも年度ごとに一括したかたちでのみの公開で、誰がどの投稿を査読したかの情報は公開いたしませんし、仮に公開を求められても開示いたしません。

会員のみなさまのご理解をお願い申し上げます。

(ふじい じんし/早稲田大学文学学術院)

Image Arts and Sciences 162 (2013) , 3

支部・研究会だより  
東部支部

奥野 邦利

これまで会報にて問題提起しました、①支部補助金の利用範囲やその方法、②研究企画委員会直属の研究会と東部支部研究会との関係、③東部支部に含まれる東北、北海道両地区に対する補助金の活用、これらのことを理事会での討議を踏まえながら、総合的な対策を検討しております。会員諸氏の活動に資するよう、新たな東部支部のかたちをできるだけ早くお示します。

(おくのくにとし/東部支部担当常任理事、  
日本大学芸術学部映画学科)

Image Arts and Sciences 162 (2013) , 3

支部・研究会だより  
西部支部

中村 滋延

## 研究会開催

平成25年1月12日(土)14:00~17:00、九州大学大橋キャンパス3号館2階322教室で2012年度の西部支部研究例会を行いました。

研究発表が2件ありました。

## 研究発表1

「中井正一の映画理論におけるハイデガーとフロイト——存在論的・精神分析理論的映画理論としての中井正一の機械美学——」  
伊集院敬行(島根大学 法文学部)

## 研究発表2

「文化資産の維持、継承を目的とした立体映像適用の有効性に関する研究」

石井達郎(九州大学大学院 芸術工学研究院)

研究例会後に総会を催し、会計報告等に引き続いて2013年度の予定について話し合いました。

2013年度の具体的な予定としては、研究例会を6月と12月に行います。

6月の研究例会は、イメージフォーラム福岡上映会との併催として、講演会を福岡市図書館シネラの協力を得て開催する予定です。12月は通常の研究例会の形式で行います(日時と場所は未定)。

総会ではその他に、西部支部の活動活性化を目指して、映像作品上映イベントの協力開催や後援などにも積極的に関係していくことを確認しました。

(なかむら しのぶ/西部支部担当常任理事、  
九州大学大学院芸術工学研究院)

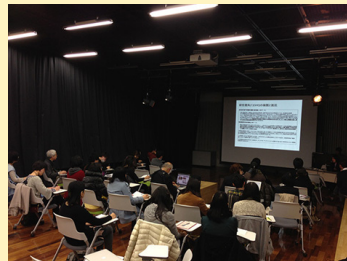
支部・研究会だより  
中部支部

和田伸一郎

3月8日に2012年度中部支部第3回研究会(於:名古屋学芸大学メディア造形学部にて、13時30分から18時まで)を開催した。第一部では研究発表が二件、第二部では学生映像作品プレゼンテーション(8校からの参加:過去最多)が行われ、その後同会場にて懇親会が催された。

【第一部】研究発表

・「占領期における「国民」の表象とアイヌ——映画『リラの花忘れじ』(1947)の改稿の分析を中心に」  
発表者:大竹瑞穂会員(名古屋大学大学院博士課程後期課程)



・「セル/デジタルをめぐる

イメージの隔たり—テレビアニメとニューメディア」

ゲスト発表者:坂井辰司氏(名古屋大学大学院博士課程前期課程)  
(発表要旨については、中部支部HP[http://jasias-chubu.org/wp/]をご覧ください)

【第二部】学生映像作品プレゼンテーション

●静岡産業大学

※出力: DVD+PC

閃光アポトーシス | 映像 | 2m10s | 荒川 沙紀 (情報デザイン学科 3年)  
iro o bi | アニメーション | 3m23s | 池谷 佳子 (情報デザイン学科 3年)  
レイニーレディー | アニメーション | 3m52s | 鈴木 千恵 (情報デザイン学科 3年)  
SOUND GAME | 映像 | 2m17s | 高山 なつき (情報デザイン学科 3年)

●中京大学

※出力: Blu-ray+PC

Flowing | 映像 | 1m40s | 福原 浩太 (情報理工学部メディア工学科 4年)  
SCAN | 映像 | 3m | 佐野 雄祐 (情報理工学部メディア工学科 4年)  
MINE! | 映像 | 2m | 伊藤 安見 (情報理工学部メディア工学科 4年)  
CABOT | CG 映像 | 2m | 小池 藍 (情報理工学部メディア工学科 4年)  
Audio Font | インタラクティブ・インストール | 加藤 貴晴 (情報理工学部メディア工学科 4年)  
GHOST | オーディオ・インストール | 松田 智也 (情報理工学部情報知能学科 4年)

●名古屋学芸大学

※出力: Blu-ray

リビング・ダイニング・キッチン | 映像 (映画) | 15m | 小林 亮公 (映像メディア学科映画ゼミ 4年)

●愛知淑徳大学

※出力: PC

パラレルシティ | アニメーション | 2m | 丹羽 彩乃 (メディアプロデュース学部 2年)  
COLOR | 映像 | 5m | 野中 麻利, 安藤 優帆, 金田 ひなた (メディアプロデュース学部 3年)  
union | 映像 | 2m | 上野 奏 (メディアプロデュース学部 3年)  
トンチンカン | 映像 | 3m | 本多 結衣 (メディアプロデュース学部 3年)  
DICTIONARY | 映像 | 5m | STUDIES (愛知淑徳学生 9 人による映像制作チーム / メディアプロデュース学部 1~3 年有志)

●椋山女学園大学

※出力: PC/iPad

Sound of 名市大~醸し出す音から 72 日後の音色~ | 映像 (ドキュメンタリー) | 13m17s | 藤原 弘華 (文化情報学部 4年)  
子ペンギンをさがして | ストップモーションアニメーション | 7m3s | 石山 舞子 (文化情報学部 4年)

●名古屋芸術大学

※出力: PC

バルカロール | 映像 | 23m | 山田 麻由 (デザイン学部デザイン学科メディアデザインコース 4年)  
Sphere | アニメーション | 2m | 羽根田 穂乃 (デザイン学部デザイン学科メディアデザインコース 3年)

●名古屋市立大学

※出力: PC

鳥の網膜像のシミュレーション映像 | 写真 | 片倉 理 (芸術工学部デザイン情報学科 4年)  
cube? | アニメーション | 2m30s | 勝田 麻美 (芸術工学部デザイン情報学科 4年)  
コミュニケーションを目的とするメディアアート作品 | インストール | 平山 奈月 (芸術工学部デザイン情報学科 4年)  
音声からタイポグラフィを生成するアプリ | アプリケーション | 内田 達也 (大学院芸術工学研究科 M2)

●名古屋大学

※出力: PC

ボディトーク | 映像 | 62m | 中野 翠 (大学院国際言語文化研究科メディアプロフェッショナル・コース M2)  
One-dimensional Cells #2 | 映像 | 規定の尺無し | 杉村 紀次 (大学院情報科学研究科複雑系科学専攻創発システム論講座 M2)

以上

(わだ しんいちろう / 中部支部担当常任理事、中部大学人文学部)

映像表現研究会

伊奈新祐・奥野邦利

報告と計画について

以下は、映像表現研究会が運営する「インターリンク=学生映像作品展 (ISMIE2012)」の京都上映会 (10月) と東京上映会・シンポジウム・パネルディスカッション (12月) の報告です。現在、「ISMIE2012」の代表作品集から今年度の選抜作品の選考を行なうため、YouTube へ対象作品を順次アップし、各参加校の推薦者による投票が行われる予定となっています。今年の全国大会 (東京造形大学) の折に公開できればと思っています。

映像表現研究会代表:伊奈新祐 (京都精華大学芸術学部)

< 1 >

「インターリンク=学生映像作品展 (ISMIE2012)」(京都上映会: 10/19-21)

京都上映会を10月19日(金)~21日(日)に「京都メディアアート週間 2012」(会場:「kara-S (カラス)」(京都四条烏丸「cocon 烏丸ビル」3階)、主催: KINO-VISION + Goethe-Institut Villa Kamogawa、協力: AG Kurzfilm、京都精華大学芸術学部映像コース、映像表現研究会)のプログラムとして実施しました。以下の参加16校による作品集DVD(各校25分以内)は、「リクエストブース」(2セット)で視聴できるように設置し、10分以内の各校代表作を2つの上映プログラムとして、各2回スクリーン上映を行いました(約70名の参加者)。



上映会場



リクエストブース

因みに「京都メディアアート週間 2012」におけるもうひとつの上映作品プログラムは、ヨーロッパでも歴史があり評価の高い国際短編映画祭「クレルモン・フェラン国際短編映画祭」からフィクション・ドキュメンタリー・アニメーション・実験映像と多様なジャンルの短編作品を含んでドイツ作品を中心とする以下の二つの作品集でした（英語字幕付き）。

\*作品集『皆のお気に入り (Everybody's Favourites)』(2011)

\*作品集『ドイツ短編映画に夢中 (A Crush on German Short Films)』(2012)

詳しくは、以下のホームページを参考にして下さい。

<http://www.kyoto-seika.ac.jp/kino/2012/index.html>

cf. (参加校：50 音順)

阿佐ヶ谷美術専門学校・メディアデザイン科/大阪芸術大学芸術学部・映像学科 & 芸術計画学科/九州産業大学芸術学部・デザイン学科ビジュアルデザインコース/京都精華大学芸術学部・映像コース/尚美学園大学芸術情報学部・情報表現学科/成安造形大学・芸術学科メディアデザイン領域/宝塚大学・東京メディアコンテンツ学部アニメーションコース/多摩美術大学映像演劇学科/東京工芸大学芸術学部・映像造形研究室/東京造形大学/東北芸術工科大学・デザイン工学専攻ビジュアルコミュニケーション領域/名古屋学芸大学・メディア造形学部映像メディア学科/日本大学芸術学部・映画学科映像コース/文教大学情報学部/北海道教育大学/早稲田大学川口芸術学校

< 2 >

「インターリンク=学生映像作品展 (ISMIE2012)」(東京上映会・シンポジウム：12/1,7,8)

今回東京会場は、週を別けて2つの会場で実施しました。

12月1日(土)は、早稲田大学の早稲田キャンパス大隈タワー26号館にて、各校25分以内で推薦された全ての作品を上映し、それに続いてシンポジウム「学生作品の今を考える」を行いました。シンポジウムでは、これまで映像制作のデジタル化によって、表現が均質になっていく傾向を度々指摘されていたことを思うと、今回の学生作品からは、表現の多様性を見ることができると評価されました。一方で、作者の世界観に焦点を合わせると、日常の中で手に届くレベルに留まろうとしている作品の多さが指摘された上で、新たな展開への発展が求められました。

司会：瀧健太郎(早稲田大学川口芸術学校)

パネラー：伊奈新祐(京都精華大学)

末岡一郎(阿佐ヶ谷美術専門学校)

奥野邦利(日本大学芸術学部)



シンポジウム会場

12月7日(土)は、Apple Store, Ginza 3Fシアターにて、各代表作(10分2作品以内)のプログラムを上映しました。

続く12月8日(日)は、同じくApple Store, Ginza 3Fシアターにて、昨年度選抜されたISMIE2011セレクト集を上映した後に、パネルディスカッション「デジタルイメージのリアリティ」を行いました。ここでは、デジタル化によってもたらされた今日の映像を取り巻く状況を、15世紀の印刷術の発明に遡りつつ、改めてメディアの展開として位置づけた上で、レフ・マノビッチのニューメディアの概念を引きながら、現代社会におけるリアリティの問題が議論されました。

司会：奥野邦利(日本大学芸術学部)

パネラー：波多野哲朗(東京造形大名誉教授)

伏木啓(名古屋学芸大学)

今回の来場者は、3日間で約150名となりました。例年よりも開催日が遅くなり、作品提出の時期に近づいた為か、学生の来場者がやや少なくなったのは残念でしたが、ゼミの振替など、ご協力頂いた先生方にはこの場でお礼申し上げます。

また、伊奈研究会代表からもお伝えしたように、今年度もISMIE2012セレクト集を作成する予定であります。すでに各校の参加作品がYou Tubeへアップロードされておりますので、会員のみなさまには、お時間の許す範囲でご覧頂ければ幸いです。You TubeにてISMIEと検索してください。

(東京会場報告：奥野邦利)

ISMIE 2012 事務局

〒176-8525 東京都練馬区旭丘 2-42-1

日本大学芸術学部映画学科

電話 03-5995-8220

担当：奥野邦利

mail : okuno.kunitoshi@nihon-u.ac.jp

以上。

(いな しんすけ/映像表現研究会代表、京都精華大学、  
おくのくにとし/映像表現研究会 ISMIE2012 事務局担当、  
日本大学芸術学部映画学科)

## ジャン・コクトーの映画『詩人の血』(1930) にみる デッサンからの変容

水田 百合子

フランスの詩人ジャン・コクトー (1889-1963) は、詩、小説、演劇、評論、美術 (デッサン)、映画と、多くの分野で活躍した。本研究は、その中でもとりわけ彼の映画に着目し、その制作過程を明らかにするものである。彼自身が監督した映画は全部で 6 本あるが、今回の発表では、最初の作品である『詩人の血』(1930) を取り上げた。アニメーションという企画で構想されていたこの映画は、最終的に実写で撮影されたが、私見によれば、その初期の構想の影響からか、コクトーが 1920 年代後半に描いた線描画の痕跡が多分に残されている。

コクトーは文章を書く以前からデッサンを描くことに慣れ親しんでおり、ある意味ではデッサンが彼の芸術活動の原点となっている。1920 年代半ばにコクトーが描いた自画像には、「死」が濃い色を落としている。ラディゲはじめ友人を失ったコクトーは、彼らと合流したいという気持ちから鏡の中に死の世界を見ていたのだろう。この自らを描くという行為は、このあと、映画『詩人の血』の主題となり、鏡の中への侵入という形で実現される。

この映画の構想と同じ時期にコクトーは、阿片の解毒治療の苦しみと治療の過程を記録したデッサン集『阿片』(1930) を残しているが、その文章やデッサンには『詩人の血』の原型とみられるモチーフがある。たとえば身体にできた傷口は、映画の詩人の傷跡を想像させるし、手足がもがれた人物や周囲の物体と一体化する身体などは、映画の中の彫像やオブジェを思わせる。これらのモチーフはおそらく、阿片中毒から抜け出す過程で、コクトー自身が明瞭に自覚していた「幻覚」である。コクトーによって、デッサンが何よりも自己の最も深い部分を表現できたメディアあったことがわかる。

『詩人の血』の冒頭でデッサンの口が動き出し手に乗り移る場面は、まさにコクトーが映画について述べるときの「動くデッサン」という表現を想起させるだけでなく、手と口がそれぞれ表現が生まれ出る部位であることに着目すれば、それが詩人の創作活動と結びついていることがわかる。『阿片』のデッサンで描かれていた身体の傷は、映画では、手に張り付いた口へと変容している。ここでは、傷から流れ出る血が、口から生まれ出る表現と対応し、傷と口が同一視されている。

その口は、彫像に乗り移る。彫像は動き出し、詩人に鏡の世界へと入るよう指示する。この彫像こそ、詩のミューズであり、詩人は、彼女の命令に従い、二つの世界を行き来する。映画はその過程を見せることにおいて適しているメディアであるといえる。とりわけ一瞬の出来事をわれわれに知覚できる速さで見せたりするコクトーの手法は、時間を操作するという問題を投げかける。すなわち映画は、自然な知覚を超えた時間の流れを作り出す芸術なのである。静止したデッサンから動くデッサンへの変容は、人間の自然な知覚を超えた世界をリアルに表現する映画の可能性を示唆している。

(みづた ゆりこ / 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程)

## 「デジタル映像の可能性」報告

デジタルメディア研究会代表 河口 洋一郎

### 1. 概況

1 月 28 日に、東京大学本郷キャンパスにおいて、デジタルメディア研究会が開催された。研究会では「デジタル映像の可能性」をテーマとして、ゲスト 4 名が研究発表を行った。その後、埼玉大学の井口壽乃と東京大学の河口洋一郎がデジタル映像に関する研究を巡り、対談を行った。約 20 人余の参加者が来場した。

### 2. 発表紹介

「自律的発光モデルを用いた光のインタフェースの考案」

松尾真由 (東京大学大学院情報学環)

本論文では、自然から着想を得たインタフェースの考案ということに主眼を置き、ホタルの発光同期リズムを疑似化した数理アルゴリズムの抽出を行い、人々にとって心地良いと感じられる明滅リズムの構築を行うことを目的としている。

また、従来のメディア・アートの研究の傾向である展示形式としての作品的意義に追従するだけでなく、作品に対して心理的・生理的側面からのフィードバックを得て、考察することにより、同期リズムに対して、人々の心理的受容のデータベースとしての価値を追求することを目指した。



図 1 : 光インタフェースの様子

「コンピュータグラフィックスによる流体表現の現実感評価」

小倉愛未 (東京大学大学院情報学環)

現在、映画やゲームなどの映像コンテンツ作品において、コンピュータでシミュレーションを行い、生成・処理した映像、すなわちコンピュータグラフィックス (以下 CG) は欠かせぬものとなっている。しかし、CG の技術面の発展がめざましい一方で、CG の映像や画像などを含むマルチメディア作品に対し、人々がどのような印象を抱くかという、感性 (「外界の刺激に応じて感覚、近くを生じる感覚器官の感受性」、「心に感じ取る能力、感受性」) を主題とする評価研究は、一部の関連研究を除き圧倒的に不足している。特に、CG の領域では、「現実感がある (= リアルな) CG」は、CG の製作において最も重要視されるテーマの 1 つであ

るにもかかわらず、「ならば、人々がどのような要素や基準をもってCGの現実感の評価を行なっているのか」という人間・感性サイドからの研究はあまり発展しなかった。そのため、CGの技術者らは、人々がCGを評価する要素や基準を知らないまま、「現実感があるCG」の作成を目指さざるを得なかったといえる。

そこで、本研究では、CGの現実感に必要な要素およびその要素同士の関係性を明らかにすることを目的として、流体表現のCG映像を対象とし、流体表現のシミュレーション・映像作成を行い、その映像を用いて現実感評価に関する質問紙調査および分析を行った。

#### 「クモの円網のリアルタイムシミュレーション」

磯部俊行（東京大学工学部システム創成学科）

最初のクモはデボン紀には生存していたとされているように、非常に古い時代にルーツを持つ生物であり、現代のクモは遙か昔からその生活史において高度に進化してきたと考えられる。また、クモ目に属する全てのクモが生成する糸は、その驚異的な強度や伸縮性により、新しい素材のヒントとしてその特性が研究されている。

さらに、クモは多くの人の間でイメージを共有できる身近な生物であることから、文化的分野でも古くから注目されてきた生物であることは、数々の作品に登場する、クモをモチーフとしたテーマやキャラクタからも明らかである。

このように、クモは様々な分野において、将来の人類の発展に寄与する可能性を秘めた重要な生物である。本研究では、クモの糸の数理モデルを提案し、そのモデルを用いて構築した円網のシミュレーションを行う。クモの研究は生態や糸の特性に終始しているため、収集が難しいクモの糸のシミュレーションを行うことが出来るようになれば、映画やゲームにおけるリアルなクモの糸の表現や、クモの生態や採餌行動のシミュレーションを行うことが出来るようになり、非常に有用である。

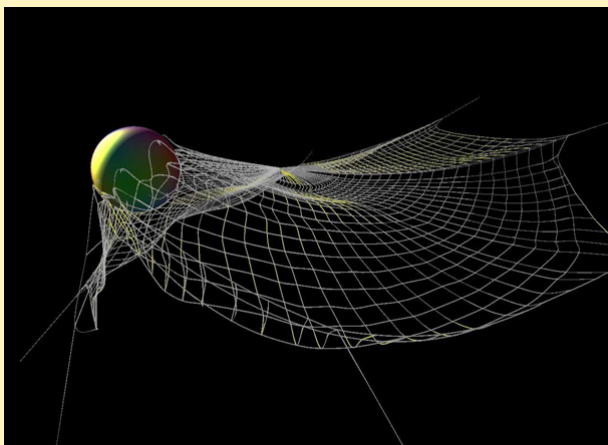


図2：クモの円網のCG表現

「デジタル映像による生命体表現の芸術的可能性についての考察  
— 1980-90年代初頭の作品分析を中心に—」

長谷川紫穂（埼玉大学大学院文化科学研究科）

20世紀後半以降のメディア・アートの確立と隆盛によりデジタル技術を導入した作品が多数みられるようになったが、そこで可能となった作品はコンピュータ・グラフィクス（CG）と組み合わせたヴァーチャル空間、鑑賞者とのインタラクション、さらにはロボティクス技術や人体機能や感覚を拡張していく表現にも結びつき今日の多様性にいきついている。こうした作品のいくつかは生物をモチーフとし、また模倣にとどまらない新たな生命体を表現として生み出している。

本論では、コンピュータを代表とする新しいメディアによって可能となった重要な表現の方法論としての、物理的・時間的な動き、変容、自律性、フィードバックといった要素の総合体としての命をもった他者＝人工生命体としての芸術作品について考察する。

#### 3. 対談：河口洋一郎（東京大学）、井口壽乃（埼玉大学）

まず、河口は生物を中心としたデザインの哲学をはじめ、現在のデジタル技術などを利用した研究について、美学的な価値、先端技術の応用、五感の活用等を話した。こういう観点から、発表者らの研究を評価した。

その後、井口氏は、「映像から生活空間へ」や、「劇場から都市空間へ」などテーマのもと、歴史的考察を交えて、スピーチを行った。

最後に、河口と井口氏は、参会者からの質問を答え、参会者とデジタル映像の可能性のテーマを巡り、深く話し合った。

以上

（かわぐち よういちろう／デジタルメディア研究会代表、  
東京大学）

## フォーラム

事務局

## ■独立行政法人日本学術振興会

第4回(平成25年度)「日本学術振興会 育志賞」受賞候補者推薦要項

## 1. 趣旨

日本学術振興会(以下「本会」という。)は、天皇陛下の御即位20年に当たり、社会的に厳しい経済環境の中で、勉学や研究に励んでいる若手研究者を支援・奨励するための事業の資として、平成21年に陛下から御下賜金を賜りました。このような陛下のお気持ちを受けて、本会では、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することを目的として、平成22年度に「日本学術振興会 育志賞」を創設しました。

## 2. 対象分野

人文・社会科学及び自然科学にわたる全分野

## 3. 授賞

授賞数は16名程度とし、受賞者には、賞状、賞牌及び副賞として学業奨励金110万円を贈呈します。

## 4. 対象者

平成25年4月1日現在34歳未満であり、次の①又は②に該当する者であって、平成25年5月1日において我が国の大学院博士後期課程(医学、歯学、薬学又は獣医学を履修する4年制の博士課程を含む)に在学している下記のいずれかの条件を満たす者

①大学院における学業成績が優秀であり、豊かな人間性を備え、意欲的かつ主体的に勉学及び研究活動に取り組んでいる大学院生であって、当該大学長から推薦された者

②①に相当する大学院生であるとして所属する学会長から推薦された者  
なお、推薦に当たっては、論文等の業績のみにとらわれず、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な者を推薦願います。

また、海外からの留学生で大学院博士後期課程に在学する者についても、推薦することができます。

## 5. 推薦権者

1) 我が国の大学の長(大学長推薦)

推薦数: 人文学系、理工系、生物系各1名、その他に分野を問わず1名の計4名まで

2) 我が国の学術団体の長(学会長推薦)

推薦数: 1名まで

※学術団体については、日本学術会議協力学術研究団体となっている学術団体に限ります。

また、自薦・個人推薦は受付けません。

## 6. 推薦手続

1) 提出書類

①「受賞候補者推薦名簿」—— 原本1部(様式1)

## 編集後記

総務委員会

■巻頭のVIEW(展望)にご寄稿いただいた加須屋明子会員のエッセイを読み、改めて今回の大会テーマである「Out of Control」について考えさせられました。3.11において再度実感したテクノロジーの他者性は、「外部」が実は身近なものであったことに気づかされる経験だったのかもしれない。「つかう」映像が汎用する現在においてこそ、「Out of Control」を主題とすることの意味があるように思います。今回執筆いただいた会員の皆様に、深く感謝申し上げます。(伏木啓)

- ②「推薦書」—— 原本1部、写し2部(様式2)  
③「推薦理由書A、B」\*注1—— それぞれ原本1部、写し2部(様式3)  
④「研究の概要等」—— 原本1部、写し2部(様式4)  
注1: ③は、推薦者以外に、研究指導者及び候補者の研究を理解している研究者の2名から、それぞれ作成いただくものです。

## 2) 応募方法

- (i) 候補者毎に、②～④を片面印刷し番号順に1部ずつ重ねて、左上をホチキスでとめてください。  
(ii) ①を表紙とし、そのリスト順に(i)をセットして提出してください。

## 7. 受付期間

平成25年6月12日(水)～6月14日(金)(必着)

## 8. 選考方法

推薦のあった候補者について、日本学術振興会に設置する選考委員会において、書類選考により面接選考対象者を決定し、面接選考を経て受賞者を決定します。

## 9. 選考基準

学業成績が優秀で、豊かな人間性を備え、意欲的かつ主体的に勉学及び研究活動に取り組んでおり、次の①又は②を満たすこと。なお、選考に当たっては、機関長からの「推薦理由」(様式2-①)及び推薦理由書A・B(様式3-①・②)を重視します。

①我が国の学術研究の将来を担う研究者となりうる卓越した能力を有しており、将来学界等への貢献が期待されること

②将来、更なる研究の発展が見込まれ、卓越した研究者に成長していく可能性を有していること

※上記①、②に該当する者の例

- 発想・着想、課題設定などにおいて、創造性・独創性が高い研究に主体的に取り組んでいる者
- 当該学問領域や学際領域における重要な基盤となる研究に主体的に取り組んでいる者
- 研究活動に関連する、ユニークな活動に主体的に取り組んでいる者
- きびしい研究環境の下でも創意工夫を凝らして、主体的に研究を進めている者
- 短期的には論文等の成果が出にくい研究に対して、忍耐強く取り組んでいる者

## 10. 選考結果の通知

選考結果は、平成26年1月下旬頃(予定)推薦者に通知します。

## 11. 授賞式

平成26年3月頃に行う予定です。詳細については、選考結果とともに受賞者に通知します。なお、受賞者の授賞式に出席する旅費は本会が負担します。

## 12. 受賞後の取扱い

受賞者は、希望により翌年度から特別研究員等に採用することとします。その場合、研究奨励金等が支給されます。特別研究員等への採用を希望する者は、翌年度の4月1日の在学年次、学位の取得状況等に応じた採用区分の特別研究員又は外国人特別研究員に所定の手続きを経て採用することとなります。既に特別研究員として採用されている受賞者についても、希望により前記と同様の扱いを受けることが可能です。詳細については、受賞者に対して別途お知らせします。なお、特別研究員または外国人特別研究員への採用に当たっては、原則として他のフェローシップ、研究費の助成等を受給することはできません。また、定められた規則等を遵守して頂きます。

## 13. その他

- 1) 推薦書等は、所定の様式を使用してください。なお、推薦書等は本会のホームページ(<http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html>)よりダウンロードすることができます。
- 2) 推薦書等の提出後、その記載事項を変更または補充することはできません。
- 3) 提出された推薦書等は返却しません。
- 4) 選考結果に対する問い合わせには応じかねます。
- 5) 受賞者の氏名、所属等は公表されるのであらかじめ承知願います。
- 6) 受賞者には、我が国の学術の振興、本会の事業の充実等のため、協力を依頼することがありますので、あらかじめ承知願います。
- 7) 推薦書類に含まれる個人情報については、「独立行政法人等の保有する個人情報保護に関する法律」及び本会の「個人情報保護規程」に基づき厳重に管理し、本事業や関連する本会の業務遂行のために利用します。

## 14. 推薦書類の提出先及び問い合わせ先

推薦書類は下記へ、配達記録の残る方法での送付によって提出してください。なお、配達会社のホームページ等で到着の確認をして下さい。

〒102-0083 東京都千代田区麹町5-3-1

独立行政法人 日本学術振興会

総務部 研究者養成課 「日本学術振興会 育志賞」担当

TEL 03-3263-0912 FAX 03-3222-1986

ホームページアドレス <http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html>